こども記者の取材教室リポート

もう戦争を起こしてはいけない

小平涼華記者

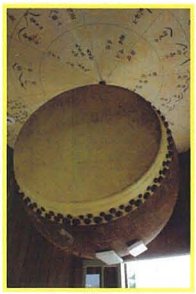
私は、小林收先生と小林濱治郎先生の話を聞いて、もう戦争は起こしてはいけないと思いました。

收先生によると、こどもたちの将来について、ちょっと体格がいい人は陸軍、細めの人は海軍、小がらな人は戦闘機乗りと言われていたそうです。

戦争中、收先生の小学校では、授業の終わりなどはチャイムではなく、かねやたいこで知らせていたそうです。少し前はサイレンでも知らせていたけれど、戦争がはげしくなるにつれて、空しゅう警報などにサイレンを使うようになったので、やめたそうです。

濱治郎先生によると、中学（今の高校）では、やることがおそかったり、しくじったりすると、数人の班の連帯責任にされて全員がなぐられたそうです。戦争が激しくなると、学校の先生たちに「ポケットに手を入れるな」「マフラーをするな」「強い人になりなさい」と言われたそうです。

正面玄関から見た旧中込学校


チャイムの役割を果たした太鼓は校舎の一番上の八角形の塔の中にあるよ

昔の学校、今と同じところもある

小田切麗親記者

昔の学校は、どんな様子だったのでしょうか。小林收さんに聞きました。毎日あった授業は、国語、算じゅつ（今の算数）、しゅう身でした。しゅう身は今の道徳みたいな教科ですが、しゅう身は「自分をきたえて、国のためにつくす人になる」というような目的だそうです。ちなみに今の道徳は「人間が社会で生きるためのよい行い」だそうです。

家庭科のような教科は高等科になるとあって、女の人が着物をぬえるようになるためにやっていたそうです。男の人は農業を勉強していたそうです。

学校の一日は、朝は8時半までに登校し、下校時間は午後3時半ぐらいだったそうです。授業は今と同じ6時間で、その後に、当番が残ってそうじをしたそうです。

昔と今の学校は、ちがうところばっかりだと思っていたけれど、同じこともあって、意外に思いました。

「修身」の教科書

家庭科のような「裁縫」の授業で使った着物の見本

アメリカ流のおしゃれな学校

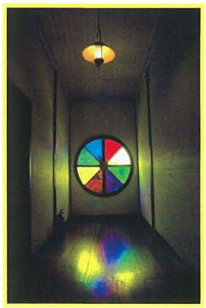
柳沢星奈記者

旧中込学校は、アメリカで約4年間、建築を勉強してきた大工さんの市川代治郎さんに設計図をかいてもらい、明治8（1875）年に完成したそうです。旧中込学校保存会会長の小林濱治郎さんに話を聞きました。

村の人たちがお金を出し合って作った学校で、昔の金額で600円だったそうです。村の人も資材を運ぶなどお手伝いをしていたことは、とてもびっくりしました。

旧中込学校は石の柱に見立てて木で作った柱、アメリカではやっていたステンドグラスなどがあります。ガラスの古い言い方をギヤマンといい、ステンドグラスの美しい様子から「ギヤマン学校」ともよばれました。「ガス灯」は当時、まだガスはなかったので灯りはともらなかったけれど、おしゃれなかざりでした。旧中込学校は全体がアメリカ流のおしゃれな学校でした。

階段は今の学校と比べて、とても急だね！


2階廊下の円窓にはステンドグラスがはめ込まれて、その美しさから、「ギヤマン学校」と当時呼ばれたよ

ガスは通っていなかったけど、正門にあこがれのガス灯をまねた飾りがあるよ

今もオルガンを弾くことができるよ

[こども取材教室in旧中込学校に参加してくれたこども記者たち]

（五十音順）

養場己武記者　内堀由菜記者　荻原詩歩記者　小田切麗親記者
小平羽流記者　小平涼華記者　小山あさひ記者　近藤旭記者
滝澤美穂記者　南河凛記者　橋部綾野記者　橋部萌野記者
溝口開人記者　箕輪凛記者　森泉華鈴記者　吉澤みひろ記者
柳沢星奈記者　和田はるひ記者

ありがとなーの
これからもガンバレ、こども記者！

信毎の新聞語 第6版

【締め切り】

しめきり

新聞社では、締め切り時間を指すことが多い。見出しや紙面レイアウトを考える「整理部」に、記事を渡す時間（時刻）などが決まっている。記者が原稿を出すのが遅れると、新聞を配達するのも遅くなるので、締め切りを守るのはとても大事。

ここだけのヒミツ！ベテラン記者の失敗談

一年生は最初みんな殴られた信毎さん

11本目

【入社31年目】見出しをつけたり、紙面をレイアウトする整理部の部長 宮沢英紀 記者

30年前の松本市。飲食街である店が新しい商売を計画し、地域住民が反対する騒ぎになりました。店側と住民側の両方の言い分を取材しなければ記事は書けません。店長の自宅を訪ねた夜、ドアが開くと「このやろう」と叫んで店長が飛び出し、胸ぐらをつかまれ押し倒されました。しばらく地面を転がりもみ合って、なんとか振り払いました。

でも肝心な言い分は取れずじまい。公衆電話からデスクに「けんかになって取材できませんでした」と報告すると、「しようがねえな、帰れ」としかられました。

途中、警察署によると、顔なじみの警察官たちが「お前どうしたんだ」とびっくりした様子。気がつくと、背広もネクタイも土まみれでヨレヨレでした。「いやあ、取材先で」と笑い話にして信毎松本本社に戻ると、今度はデスクや先輩が「お前どうしたんだ」。

「これは言論への暴力だ」と話が大きくなり、てん末を書いて長野本社に報告しました。警察の刑事課からも電話がきました。

結局「今回は大げさにしない」と落着しましたが、「信毎の記者が殴られた」と地域に話が広がり、しばらく取材の先々で「殴られた信毎さん」と言われ困りました。